

愛の測定

ジック・ルービン

2024-11-09

Rubin, Z. (1970), "Measurement of Romantic Love". *Journal of Personality and Social Psychology*, 16(2): 265–273.

愛は一般的に、最も深く、意味のある感情であるとされている。愛はあらゆる時代の芸術や文学で卓越した地位を占めており、大多数の人々が少なくとも時折は経験すると推測されている。さらに、西洋文化においては、愛と結婚の結びつきが、個人と社会構造を結びつける特別な地位を与えている。

これらの考察を踏まえると、社会心理学者が愛にほとんど注目を払っていないという事実は驚くべきことである。対人魅力が社会心理学の理論と研究の主要な焦点であったにもかかわらず、この分野の研究者たちは、愛を独立した概念として捉えようとしなかった。例えば、ハイダー (1958) にとって、「愛すること」は単に強い「好意」に過ぎず、両者の間にある可能性のある質的な違いについては言及されていない。ニューカム (1960) も、「対人魅力の多様性」のリストに愛を含めていない。さらに、「ロマンチックな」魅力を対象とした実験においてさえ (例えばワイスター, 1965)、従属変数は単なる「好意」の言語的報告に過ぎない。

本研究は、愛がそれ自体独立して概念化することができるもので、また測定可能なものであるという仮定に基づいている。構成概念の妥当性を検証するという戦略に従い (参照: Cronbach & Meehl, 1955)、愛を定義し、測定し、他の変数との関係性を評価しようとする試みは、どれも一つの試みの一部と見なされる。ここ試みの初期想定は、愛が特定の他者に対する個人の態度であり、その他者に対して特定の考えをし、感情を抱き、行動をとる傾向を伴うものである、というものである。この想定により、愛は対人的 ^{アトラクション} 誘引に対する社会心理学的アプローチの主流に位置付けられ、「好意」、「^{ライキング}称賛」、「^{アドミレーション}尊敬」といった他の種類の魅力と並ぶものとして考えられる (参照: ニューカム, 1960)。

愛を多面的な「態度」として捉える見方は、愛を「感情」あるいは「欲求」、あるいは一連の行動として捉える理論家たちよりも広い視野を提供する。その一方、愛が特定の対象に結びつけられているということは、愛を、個人のパーソナリティや経験の一側面であるが、それは特定の人物や状況を超越して存在すると見なす立場 (たとえば Fromm, 1956) よりも限定された見解につながる。オルリンスキー (Orlinsky 1970) が示唆しているように、異なる種類の「愛」(例えば、親子愛、結婚における愛、神への愛) には重要な共通要素が存在する可能性がある。しかし、本研究の焦点は、未婚の異性間の愛、すなわち結婚につながる可能性のある「ロマンチックな愛」に限定されている。

本研究は三つの主要な段階を有している。第一に、紙と鉛筆を用いた愛の尺度が作成された。第二に、その愛の尺度を用いて学生の間際カップルを対象とした質問票調査が実施された。第三に、愛の尺度の予測妥当性が実験室での実験によって評価された。

1 DEVELOPING A LOVE SCALE

愛の尺度の開発は、いくつかの考慮事項に基づいて行われた。

1. 尺度の内容がロマンチックな愛の初期の概念的定義を構成するため、その項目は既存の理論的および一般的な愛の概念に基づくものでなければならない。

2. これらの項目への回答が、単一の根底にある態度を捉えている場合、それらの回答は高い相関性を持つ必要がある。

愛の尺度の弁別的妥当性を確立するために（参照：キャンベル, 1960）、愛と並行して好意の尺度が構築された。目標は、内部的一貫性を持ちつつも概念的に異なる愛と好意の尺度を開発し、実際には中程度の相関にとどまるようにすることであった。

この手続きの第一歩として、回答者が特定の他者（「対象者」）に対して抱く態度に関する大量の質問項目を収集した。この項目の半分は、愛の本質に関する広範な考察に基づいて提案された（例：de Rougemont, 1940; Freud, 1955; Fromm, 1956; Goode, 1959; Slater, 1963）。これらの項目は、身体的魅力、理想化、助けたいという傾向、感情や経験を共有したいという欲求、排他性と没入感、所属欲求や依存欲求の感覚、両面的な感情の保持、関係における普遍的な規範の相対的な重要性の低さに関するものであった。もう半分の項目は、対人魅力（または好意）に関する既存の理論的および実証的文献に基づいて提案された（参照：Lindzey & Byrne, 1968）。これには、様々な場面で対象と親交を深めたいという欲求、複数の側面での対象の評価、責任や公平性の規範の顕著さ、尊敬や信頼の感情、自分と似ていると認識することなどが含まれていた。

この初期の項目分類に一定の合意的妥当性を与えるため、二つの連続した学生と教員の審査員パネルが、それぞれの個人的な理解に基づいて「愛」と「好意」のカテゴリに項目を分類した。この選別手続きの後、修正された70項目が198名の心理学入門クラスの学生に通常の授業時間内で実施された。各回答者は、もし実際相手がいれば、その恋人に関して、また、非ロマンチックな関係の異性の「プラトニックな友人」に関してそれぞれ項目を記入した。以降の研究段階で使用された愛と好意の尺度は、これらの回答に基づく因子分析によって導き出された。恋人（または「恋愛相手」）に関する回答とプラトニックな友人に関する回答のそれぞれで、二つの別々の因子分析が行われた。どちらの場合も、総分散の大部分を説明する一般因子が存在し、この一般因子で最も高い負荷を示した項目、特に恋人に関しては、ほぼすべて事前に愛の項目として分類されていたものであった。これらの高負荷項目が、採用されたより限定的な愛の概念を定義した。一方で、好意の尺度を構成する項目は、プラトニックな友人に関する第2因子で高い負荷を示したものを基にしていた。尺度の開発手続きの詳細については、Rubin (1969, 第2章) に記されている。

愛と好意の尺度を構成する項目は表1に示されている。愛の尺度は因子的に一つの単位として構築されたが、その内容はロマンチックな愛の三つの主要な構成要素を指摘している。

1. 所属欲求と依存欲求—例えば、「もし___と一緒にいられなくなったら、非常に悲しい思いをするだろう」や「___なしではやっていくのが難しいだろう」という項目がこれに該当する。

2. 助けたいという傾向—例えば、「___が気分を悪くしているなら、まず最初に彼（彼女）を元気づけることが私の義務だと思う」や「___のためならほとんど何でもするだろう」という項目がこれに該当する。

排他性と没頭—例えば、「___に対して非常に独占的な気持ちを抱く」や「___にはほぼすべてのことを打ち明けられると感じている」という項目がこれに該当する。

尺度によって定義されたロマンチックな愛の概念は、折衷的な特徴を持つ。この概念における所属欲求と依存欲求の要素は、フロイト (1955) による愛を昇華した性的衝動とする見解や、ハーロウ (1958) による愛を

愛着行動とする考え方を想起させる。助けたいという傾向は、フロム (1956) が愛の構成要素として特定した「配慮、責任、尊敬、知識」の分析と一致する。また、特定の相手に没入するという側面は、スレーター (1963) が指摘した二者間の親密さの社会的構造的な影響を最も直接的に反映している。一方、好意の尺度によって定義される好意の概念には、対象者に対する肯定的な評価と尊敬、さらに対象者が自分に似ていると感じる認識が含まれる。これは、過去の研究で用いられてきた「魅力」の測定尺度と比較的密接に一致している (参照：リンジー&バーン, 1968)。

2 QUESTIONNAIRE STUDY

13項目からなる愛と好意の尺度が、それぞれの項目を交互に配置された形で、1968年10月にミシガン大学で158組の交際中(婚約はしていない)カップルを対象に実施された質問票に含まれた。参加者はポスターや新聞広告を通じて募集された。この質問票には、交際相手について最初に、そして親しい同性の友人について後に回答する愛と好意の尺度に加え、いくつかの性格尺度や交際関係に関する背景情報の提供依頼も含まれていた。各パートナーは個別に質問票に回答し、参加報酬として1ドルが支払われた。典型的なカップルは、交際期間がおおよそ1年である、男子大学生の3年生と女子大学生の2年生または3年生から構成されていた。

愛と好意の尺度の各項目は、「全く当てはまらない・全く同意しない」(1点)から「完全に当てはまる・完全に同意する」(9点)までの連続体で回答され、各項目の得点を合計して総合スコアが算出された。表1には、各項目の平均値と標準偏差、さらに各項目と尺度全体のスコアとの相関が示されている。いくつかの場合で、例えば愛の項目が総合的な好意スコアとより強く相関するなど、不適切な相関パターンが見られた。このような不適切なパターンは、将来の尺度改訂において具体的な修正の必要性を示唆している。しかし全体として、相関パターンは概ね適切であった。愛の尺度は高い内部一貫性を示し(女性でアルファ係数は0.84、男性で0.86)、期待通り、好意の尺度とは中程度の相関にとどまった(女性で $r = 0.39$ 、男性で $r = 0.60$)。男性の間で愛と好意の相関が女性よりも高いという発見($z = 2.48, p < .02$)は予想外であり、女性が男性よりも二つの感情をより明確に区別する傾向があるという見解を示唆する(参照：バンタ&ヘザリントン, 1963)。

表2によると、男性(ガールフレンドに対する)と女性(ボーイフレンドに対する)の愛のスコアはほぼ同一であった。しかしながら、女性が自分のボーイフレンドに対して抱いている好意は、そのおかしにボーイフレンドから抱かれている好意よりも高い($t = 2.95$, 自由度 = 157, $p < .01$)。表1の項目平均を調べると、この性差は、女性がボーイフレンドに対して、知性、判断力、リーダーシップの可能性などの「タスク関連」次元でより高い評価を与えたことに起因する可能性が示唆される。これらの項目が好意の構成概念を正確に反映しているのであれば、男性は確かに女性よりも「好意を抱かれやすい」(ただし「愛されやすい」というわけではない)傾向があるといえる。しかし、表2は同性愛友人に対する好意については性差が存在しなかったことも示している。同性の友人に対する平均的な好意スコアは男女でほぼ同一であった。したがって、このデータは「男性が一般的に女性よりも好意をもたれやすい」という結論を支持するものではなく、交際関係においてのみ男性がより好意を持たれることを示しているに過ぎない。

表2は、女性が同性の友人を愛する傾向が男性よりも高いことも示している($t = 5.33$, 自由度 = 314, $p < .01$)。この結果は、男性と女性の友情に関する文化的ステレオタイプと一致している。女性同士が「愛している」と互いに言い合うことが、男性よりも社会的に受け入れられやすく、また女性は同性の友人により多くのことを打ち明ける傾向があると報告されている(Jourard & Lasakow, 1958)。最後に、表2で示された平均値は、男女ともに交際相手を同性の友人よりもやや多く好む一方で、交際相手を友人よりもはるかに深く愛していることを示している。

愛と好意の概念的な区別に関するさらなる洞察は、表3に示された相関結果から得られる。予想通り、愛のスコアは、回答者が「恋愛中であるかどうか」を報告した内容や、現在の交際相手との結婚の可能性の見積もりと強い相関があった。一方、好意のスコアはこれらの指標と中程度の相関しか示さなかった。

愛のスコアは結婚の可能性の認識と強く関連していたものの、これらの変数は経験的にも概念的にも区別されるべきである。表3によれば、交際期間の長さは、男性の愛のスコアとは無関係であり、女性においてもわずかにしか関連していなかった。一方で、回答者が結婚に近いと感じる度合いは、男性・女性ともに交際期間と有意に相関していた。この結果は、愛が比較的短期間で発展する可能性がある一方で、結婚への進展は通常、より長い時間をかけて進むという一般的な観察に一致している。

愛の尺度の構成概念妥当性は、交際相手に対する愛が同性の友人に対する愛とわずかにしか相関していないという結果によってさらに裏付けられた（女性で $r = .18$ 、男性で $r = .15$ ）。また、マーロウ-クラウン社会的望ましき尺度のスコアとは相関が見られなかった（女性・男性ともに $r = .01$ ）。これらの結果は、愛の尺度が特定の他者に対する態度を測定しており、より一般的な対人関係の指向性や反応傾向を捉えていないという仮定と一致している。最後に、二人のパートナーの愛のスコアは中程度の対称性を示す傾向があった。女性と男性の愛の相関は.42であった。一方、好意に関するカップル内の相関はやや低い。（ $r = .28$ ）。結婚の可能性に関するパートナー間の見積もりについては、相関がかなり高かった（ $r = .68$ ）。

3 LABORATORY EXPERIMENT: LOVE AND GAZING

4 結論

CONCLUSION

「愛や愛情に関して言えば」とハーロウは1958年に記した。「心理学者たちはその使命を果たしていない。私たちが愛について知っていることは、単純な観察を超えるものではなく、私たちが愛について書く少ない内容も、詩人や小説家たちによってはるかに優れて表現されてきた(673)。」この論文で報告された研究は、この状況を改善する試みとして、ロマンティック・ラブに関する初歩的な社会心理学的概念を導入し、検証するものである。愛と好意の区別がなされ、その合理性はアンケート調査の結果によって裏付けられた。例えば、回答者がパートナーと結婚する可能性を推定する際、その愛情が好意よりも強く関連していることが明らかとなった。愛と結婚の文化的に規定された関連性を考慮すると（好意と結婚は必ずしもそうではないが）、この相関のパターンは適切であると考えられる。なお、アンケート調査の他の結果については別の機会でも報告されるが、ロマンティック・ラブという測定可能な概念が、個人と社会構造的なレベルの社会行動分析をつなぐ価値を持つことを示唆している。

本研究はロマンティック・ラブの統一的な概念を構築することを目的としていたが、今後の研究の有望な方向性として、ロマンティック・ラブ関係のパターンを区別する試みが挙げられる。このような区別を行う理論的な基盤の一つとして、パートナー間で交換される対人的な報酬の性質が考えられる(Wright, 1969を参照)。例えば、交換される最も顕著な報酬が安全性に関するものか、刺激に関するものかによって、ロマンティック・ラブにおける態度や行動が異なる可能性がある（「欠乏愛」と「存在愛」に関するマズローの議論を参照, 1955）。このようなパターンを区別するために注目すべき行動変数として、性的行動、助け合い、自己開示などの分野が挙げられる。